



Title	李眞恵『二つのアジアを生きる -現代カザフスタンにおける民族問題と高麗人（コリョ・サラム）ディアスポラの文化変容-』京都：ナカニシヤ出版，2022年，vi + 282頁
Author(s)	櫻間，瑞希
Citation	日本中央アジア学会報，19，71-77
Issue Date	2023-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.19.71
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94166
Type	journal article
File Information	JB19_015sakurama.pdf



李眞恵『二つのアジアを生きる——現代カザフスタンにおける 民族問題と高麗人(コリョ・サラム) ディアスポラの文化変容——』

京都：ナカニシヤ出版、2022年、vi+282頁

櫻間 瑞希

本書は、著者である李眞恵氏が2019年9月に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科に提出した博士論文「現代カザフスタンにおける高麗人(コリョ・サラム)社会の変容」
をもとにした単著である。

韓国を出身地とする著者は学部時代にカザフスタンを訪れ、当地のコリョ・サラムと出会っ
たことを「自分自身と出自は同じといえるかもしれないのに、アジア人として全く異なる歴
史を生きてきた彼らの生きざまに強烈な関心を覚えた」(271頁)とあとがきで回顧する。本
書はまさに、カザフスタンのコリョ・サラムの生きざまを——より具体的には、ソ連時代か
ら今日にいたるまでの当地のコリョ・サラム社会が、いかに独自性をもって生き抜こうとし
てきたのかを、多言語にわたる文献資料の分析とフィールドワークをもとに論じた成果であ
る。本稿では、まず本書の位置付けを確認したのち、本書の構成に沿ってその内容を概観し
ていきたい。

かつてソ連を構成した国や地域に関する研究が活発になされるようになったのは、ソ連解
体後のことであり、本書が対象とするカザフスタンもその例に漏れない。独立とともに膨大
な数の資料が公開され、研究遂行上の制限は緩やかなものとなり、今日にいたるまでさまざ
まな視座からの研究が急速に進められてきた。カザフスタン国内の諸民族をめぐっては、国
家と民族の関係、とくに国民統合の観点から少数民族に注目した研究の蓄積もいくらか生ま
れてきた一方で、著者は「その内実についてはほとんど論じられることがなく、多くの研究
が民族の個別のおよび特定の時代的な特性を明らかにするにとどまってきた」(7頁)と指摘
する。コリョ・サラムに関する研究は、悲劇的な強制移住を軸とした民族の移動史が主な関
心であり続けてきた。帝政期からソ連期までのコリョ・サラム全体の歴史に関する成果は多
く生み出されており、たとえば、移動と適応に焦点を当てた研究については、李愛俐娥氏や
岡奈津子氏による成果など、日本語で読めるものに限ってもすでにいくつかの蓄積がある。
ただし、ソ連解体以降のコリョ・サラム社会の変容とありようについては、依然として議論
の余地が多く残されている。

コリョ・サラムの居住地域は、ソ連解体後には国境によって分けられることになった。「依然として旧ソ連全体という統一空間として認識する傾向が強い」(9頁)ことが指摘されるように、かれらの社会のありさまは、独立後の各地におけるさまざまな外的要因などによって一様ではなくなっていったと考えられる。評者が研究対象とするこの地域のタタールにも同様のことが言える。ソ連解体、そして、独立以降、それぞれの国家が独自の路線を歩むようになってからすでに30年以上の時が経過した。中央アジアと総称される国々には歴史的・文化的な連続性がある一方で、それだけでは議論ができないほど各国の状況はさまざまな側面から変容している。著者は「主権国になった旧ソ連地域諸国の変化、すなわち基幹民族中心の国民統合過程への対応状況と、その中でのコリョ・サラム社会の動態を実証的に研究する試みはこれまで十分ではなかった」(10頁)ことを先行研究の不足点として挙げる。これらをつまめると、本書はカザフスタンのコリョ・サラム社会というミクロな視点に立った研究である点と、その変容に注目したという点において、個別的な視点から中央アジアを論じる意欲的な研究と言えるだろう。

本書は序論および結論を含め、全8章から構成される。序論では、先行研究の検討を経て、ソ連解体後のコリョ・サラム社会に包括的な学問的関心が向けてこられなかったことが問題意識として提示される。先行研究の特徴として、「強制移住という「悲劇の歴史」を明らかにするというスタンスが主流だった」(9頁)ことを挙げたうえで、コリョ・サラム社会の実態や変容に重点を置く必要性を提示する。これを踏まえ、「独立直前、ソ連時代のペレストロイカ期の民族再生によるコリョ・サラムの社会の変容の実態はどのようなものか」(12頁)、「カザフスタン独立後、コリョ・サラム社会はどのように変容しているのか」(同)、「ペレストロイカ期から独立以降現在に至るまでのコリョ・サラムの主体的変容を背景に置いたときに、現代カザフスタン・コリョ・サラムの生存戦略はどのようなものか」(13頁)という三つの問いが設定される。本章の特筆すべき点は、先行研究のなかで韓国語文献が数多く取り上げられていることである。日本の中央アジア研究者の多くがロシア語だけでなく、カザフ語やウズベク語などの文献も参照するようになって久しいが、韓国語文献にまで目を通せる研究者はまだごく一部であろう。本章は韓国語で発表されたコリョ・サラムに関する先行研究を日本語で紹介した、きわめて貴重な資料的側面も併せ持っていると言えるだろう。

第1章「多民族国家カザフスタン」では、本書が対象とするカザフスタンの国境画定から現在までの経緯を総括しながら、ソ連から独立国家たるカザフスタンにいたるまでの民族政策の変遷と少数民族の概念の変化についても議論される。これらの議論をもとに、今日のカザフスタンの国民統合において、基幹民族であるカザフと非カザフである少数民族がどのように捉えられてきたかを検討する。カザフ以外にもさまざまな民族的背景をもつ国民を抱えるカザフスタンでは、独立後は「基幹民族中心の形で非基幹民族の多様性を受容していく方

向性」(41 頁)を取ってきた。つまり、カザフスタンでは基幹民族であるカザフを中心とする国家建設と、諸民族の平和的な調和と共存の両方が同時に目指されており、「カザフ人中心主義の「カザフ化」と、非カザフ人の諸民族を統合しようとする「多民族共存主義」という二つの政策を同時に実現しようとしている」(42 頁)ことが示される。カザフスタンの国民統合をめぐっては、これまでにさまざまな研究がなされてきたが、カザフ化か多民族共存かのどちらかに焦点を当てて論じたものも少なくなかった。本書は、これら二つの方向性の両立を体现するための装置として、カザフスタン民族会議に注目する。この視点は新しいものであり、注目に値する。一方で、先行研究でも言及されているが、民族会議それ自体はナザルバエフ初代大統領を支持する意図をもって組織されたものでもあり、形式的な側面があった。コリョ・サラム社会はそのことをどのように捉えてきたのだろうか。今後さらに民族会議のありさまにまで踏み込んだ議論の展開も期待される。

第2章「カザフスタンにおける一民族としてのコリョ・サラム」では、ディアスポラとしてのコリアン・ディアスポラの位置付けが検討されるとともに、これまでにさまざまに呼ばれてきた人々がどのように「コリョ・サラム」と自己認識するようになっていったか、ソ連時代にコリョ語で刊行された『レーニン・キチ』紙の記事の分析と当事者への聞き取りを通じて論じられる。本章では、朝鮮人でも韓人でも高麗人でもなく、「コリョ・サラム」という呼称がどのように生み出され、選択され、自らのよりどころとして受容されていったかを描き出すとともに、コリョ・サラムと自称する人々のなかにも多様なアイデンティティが形成されてきたことが示される。著者は、各地のコリョ・サラムのアイデンティティの形成と変容の要因として、「繰り返された移住と定着の歴史的経験と、ソ連解体や諸国の独立という出来事」(100 頁)と総括するが、とくに後者は重要な指摘である。つまり、ソ連解体と独立を経て、別々の国家に分かれたかれらは、各地で独自のアイデンティティを形成していくことになった。この視点は、以降で論じられるカザフスタンのコリョ・サラム社会の変容に関する議論の前提にもなっている。

第3章「エスニック・メディアと『コリョ・イルボ』」では、第4章と第5章でコリョ・サラムのメディアを分析する足掛かりとして、エスニック・メディアの定義と分類を明確に提示したうえで、旧ソ連地域におけるコリョ・サラムの歴史が記録されてきた『コリョ・イルボ』紙とその前身紙の位置付けと歴史的な変遷を検討する。『コリョ・イルボ』紙で取り上げられる内容は、時代とともに大きく区分されるという。ソ連期にはコリョ・サラムの言語や文化、アイデンティティに関する内容が中心だった一方で、独立以降は国民統合に伴う変化、それに伴って変化していく彼らのアイデンティティに関する内容が主軸となっていった(109 頁)。

第4章「ベレストロイカ期の『レーニン・キチ』から見たコリョ・サラム社会の変容」では、

ソ連期のコリョ・サラムの主要メディアであったコリョ語新聞『レーニン・キチ』の分析を通じて、とくにペレストロイカ期の民族再生に関する言論活動について考察する。ペレストロイカ期にこれまで隠されてきた公文書が公開されると、コリョ・サラムは強制移住の歴史にはじめて言及できるようになり、紙上ではさまざまな視点からの議論が活発に行われるようになった。本章では、民族再生に関する記事が掲載されはじめた1986年から1991年までの全記事(計3万184件)をリスト化し、分析対象としている。これらの記事はキーワード分類がなされるだけでなく、定期欄・不定期欄の区分、どの言語で書かれたか、といった情報も年ごとにまとめられている。記事の分析からは、コリョ・サラムの民族再生をめぐる議論は民族言語の再生、民族文化の再生、民族の歴史と記憶の再生を目指したものから始まり、やがて自己認識の高揚と自治の要求に帰結したことが示される。民族自治は実現しなかったものの、民族再生をめぐる議論は紙上から始まり、やがて世論化されていった。この時代の民族再生に向けたコリョ・サラムの動きについて、著者は「かなりの程度、一体的で主体的・積極的対応だった」(142頁)と総括し、今日にいたるまでのコリョ・サラム社会の変貌の全体像を捉えるための出発点に位置付けられるとする。

第5章「カザフスタン独立後の『コリョ・イルボ』から見たコリョ・サラム社会の変容」では、独立後カザフスタンのコリョ・サラム社会の変容について、『レーニン・キチ』紙の後続紙である『コリョ・イルボ』紙の分析を通じて検討する。本章ではカザフスタン独立直前の時期を含む1991年から2017年までの全記事(計5万8,175件)をリスト化したうえで、前章での方法論を踏襲した分析がなされた。ここではとくに、第1章で示されたカザフ中心主義と多民族共存主義の同時推進に対するコリョ・サラム社会の反応に関心を寄せ、カザフ語政策やカザフ文化・歴史などに関する政策、民族会議の紹介および解説の記事とその後の対応に焦点を当てる。『コリョ・イルボ』紙では、これらの政策に賛成する論調の記事に対し、賛同意見が反映された関連記事が定期欄に掲載されるようになった。つまり、定期欄を通じて、政府への支持・賛同の姿勢を示してきたとも言えるだろう。こうした一連の流れについて、カザフスタンのコリョ・サラムは「国家主導の国民統合に対応し、カザフスタン市民としてのアイデンティティを構築しつつ、変容している」(178頁)と著者は分析する。つまり、カザフスタンの国民統合に対応する過程で、カザフ語やカザフ文化を学ぶことにも前向きな姿勢を示しながら、ほかでもない「カザフスタンの」コリョ・サラムとしてのアイデンティティが再構築されているという指摘である。他方で、本章で取り上げられた『コリョ・イルボ』紙のいくつかの記事のなかには、姓だけを見ればコリョ・サラム的ではないと思われる執筆者によるものも含まれている。かれらがどのような背景の書き手なのか、あるいは、他紙から転載されたものなのか、些細なことだが気になった。今後、執筆者個々人の背景にまで踏み込んだ分析がなされれば、『コリョ・イルボ』紙の位置付けはより明確になるかもしれない。

第6章「現代カザフスタン・コリョ・サラムの生存戦略」では、ここまでの議論を前提として、今日のコリョ・サラムのありさまについて生存戦略という視点から検討する。ソ連解体と独立を経験し、韓国や北朝鮮への帰還、あるいは、ほかの土地に移り住む選択肢もあったなかで、かれらはカザフスタンに残留することを選択した。残留という選択は、生存戦略という観点から論じるうえでも前提となっている。では、かれらがいかにカザフスタンの地でコリョ・サラムとして生き、どのようにその存在感を示そうとしているのか、そして、どのようにカザフスタン市民であろうとしているのか、フィールド調査での知見をもとに検討されている。その結果として、かれらがカザフスタン文化のなかの一部として自らの文化を脱構築し、位置づけ直してきたこと、韓国とカザフスタンの交流のなかで存在感を発揮してきたこと、民族会議への積極的な参加を通じて、自らの存在感を示しながらある程度 of 政治力も獲得してきたことが示された。

そして最後に、結論では、序論で設定された三つの問いへの応答がまとめられている。ペレストロイカ期にあらわれた自治への要求と自己認識によって再構築されてきたコリョ・サラムのアイデンティティは、さらに国民統合の過程のなかで再構築され、今も引き続き流動的に変容の最中にある。かれらが当初置かれた環境は、ほかの民族と比較しても不利な状況と言えるものであった。そこで、かれらはすべての条件と状況をありのままに受け入れる受容的な態度をもちながらも、限られた条件のなかで最大限の努力をする主体性をもつという「生存戦略」をとった。著者はこのようなカザフスタンのコリョ・サラムの生存戦略を「受容的対応」と説明する。以上が、本書の概要である。

本書の意義は、まず何よりも、中央アジア地域研究とコリアン研究への貢献という点に集約される。カザフスタンのコリョ・サラム社会の変容の背景には、独立後の政治文化や社会の変容がある。第1章でも論じられたように、カザフスタンではカザフ化と多民族共存主義を柱とした国民統合政策が同時に展開されており、若い世代の政治参加も盛んである。この地の多民族共存は今なお変化の途上にあり、本書はその変容と人々の受容を、コリョ・サラムを通じて描いたという点で意義を持つ。著者も随所で取り上げるように、たとえばキムリッカが欧米における国民国家を土台として論じてきた多文化主義について、カザフスタンという文脈で、さらには、旧ソ連という文脈で論じる可能性を開くものでもある。

本論からはやや外れるが、評者のフィールド経験を解釈するにあたり興味深い記述もあった。『コリョ・イルボ』紙は『レーニン・キチ』紙と比べるとロシア語で書かれた記事が多く、これについて著者は「二世以降の世代のコリョ・サラムだけでなく、他のエスニック集団の構成員を読者に設定しているケースと見られる」(108頁)としている。評者はこれまでにタシュケントのさまざまなタタールの自宅を訪ねる機会があったが、当地のコリョ・サラムによる新聞『Корейцы Узбекистана』を家のどこかに見つけることが頻繁にあった。その内容分

析は別の機会に譲るが、当該紙もロシア語で執筆された記事を中心としており、時に政策の肯定的な紹介・解説記事のほか、当地で成功しているコリョ・サラムを紹介する記事を数多く掲載しているように見えた。タタールがコリョ・サラムの新聞を読んでいるということは、まさに他のエスニック集団の構成員も読者に設定された結果であり、ある意味では新聞が「ウズベキスタンの」少数民族であることを認識させる、あるいは、認識するための装置的な役割を果たしているのかもしれない、と仮説的に考えるきっかけを与えてくれた。本書は中央アジアをフィールドとする研究者にとって、ヒントとなるような記述が随所に散りばめられた一冊でもある。

このように、本書の価値は揺るぎないものであり、この研究成果に日本語でアクセスできることは喜ばしいことである。そのうえで、本書で論じられた研究のさらなる進展のために、いくつかの点のねだりをしたい。第6章では、カザフスタンのコリョ・サラムの生存戦略の特徴を検討するにあたり、カザフスタン・ドイツ人とカザフスタン・ウイグル人の事例が持ち出されている(221～228頁)。これに関して、ほかの少数民族とのかかわりと、かれら非基幹民族にとってのカザフスタンの位置付けに関する議論もあったならば、今日のカザフスタンにおける多民族共存主義のありさまをさらに深く、より具体的に提示できるのではないだろうか。本書ではあくまでそれぞれの状況を比較対象として参照するにとどまっており、それぞれの民族同士の交流などに関する言及はない。ここには今後の研究のさらなる発展の余地があるように思われる。この地にはさまざまな民族がモザイクのように暮らし、それぞれが日常的に大小さまざまな接点を持ち続けてきたはずである。少なくとも、今日では民族行事や民族会議にさまざまな民族の代表が出席し、公私さまざまなレベルで相互に接点を持っている。たとえば、カザフスタンの諸都市においても毎年夏ごろに開催されるサバントゥイは、本書の読了後に持った視点だが、カザフの歌や詩も披露されることでカザフスタンという文脈に祭を落とし込み、さらに、地元のさまざまな民族的出自の人々が参加することで、カザフスタンの多民族共存空間を可視化する側面があるようにも見える。ソ連期から現在にいたるまで、たとえばエスニック・メディアや民族団体などは、民族を越えての交流を持っていたのだろうか。また、かれらは自身がカザフスタン市民の一員であることを、それぞれどのように表現し、内面化してきたのだろうか。

また、今後さらに検討が期待される視点として、若い世代の現在とこれからの変容が挙げられる。本書で取り上げられたカザフスタンのコリョ・サラムの議論は、現在にいたるまでカザフスタン国内に暮らし続ける人々を対象としている。一方で、カザフスタンで生まれ育った若い世代のなかには、韓国をはじめとする諸外国に移住したり、カザフスタンとのあいだを行き来したりする人も少なからず存在すると考えられる。たとえば、2021年の時点で韓国国内には約3万人のカザフスタン国籍在留者がおり〔韓国統計局国家統計ポータル 2022〕、

その民族的な内訳は不明だが、なかにはコリョ・サラムも相当数含まれるであろう。かれらの存在は、今後のカザフスタンのコリョ・サラム社会のありかたに何らかの影響を及ぼするのだろうか。通時的な研究に期待したい。

かくして評者が今後読みたい視点をないものねだりする形となってしまったが、むろん、これらは本書の欠点でもなければ、これらによって本書の価値が損なわれることもない。最後に、本書の最大の価値は、強制移住の犠牲者として受動的に変容させられる、あるいは、変容せざるを得なかった悲劇的な存在としてコリョ・サラムを捉える視点から離れ、主体的に変容していこうとする存在として捉え直し、描いた点にあると評者は理解している。これまで悲劇的存在として描かれ、なかにはその価値観を内面化してきた人もいるであろうコリョ・サラムにとっては、本書は自らの民族の歴史を肯定的に捉えるための根拠になりうると思われる。いつの日か、本書がコリョ・サラムの多くが読むことのできるロシア語にも翻訳されることを願ってやまない。

参考文献

韓国統計庁国家統計ポータル(KOSIS) 2022 『국적(지역) 및 연령별 체류외국인 현황』(国籍(地域)および年齢別在留外国人の現況)、URL: https://kosis.kr/statHtml/statHtml.do?orgId=111&tblId=DT_1B040A6, 閲覧日: 2023年8月8日。

李愛俐娥 2000『中央アジア少数民族社会の変遷——カザフスタンの朝鮮人を中心に——』京都: 昭和堂。

Kymlicka, Will. 1995. *Multicultural Citizenship: A Liberal Theory of Minority Rights*, Oxford: Oxford University Press.

Oka, Natsuko. 2001. “The Korean Diaspora in Nationalizing Kazakhstan: Strategies for Survival as an Ethnic Minority,” *Koryo Saram: Koreans in the Former USSR*, Korean and Korean American Studies Bulletin, 12(2/3), New Haven: East Rock Institute, pp. 89–113.

(中央学院大学現代教養学部)